方法

目的

本研究は、小・中学生用形容詞版 Big Five 性格検査の開発を最終目的としている。質問紙尺度ではなく、形容詞版を開発しようとするのは、小・中学生に対して、潜在連合テスト（Implicit Association Test；IAT）による Big Five 性格検査を予定しているからである。具体的には、小学生用国語辞典から、性格を表現する言葉を選び、使うか/使わないか、自分に当てはまるか/当てはまらないかについて調査した。調査した性格表現用語から、使用頻度並びに自分への当てはまり度の高い用語を選び、因子分析によって、5 因子が抽出されるか否かを検討した。

方法

1）研究協力者：863 人（小学生 479 人（男性 248 人/女性 224 人）中学生 384 人（男性 184 人/女子 193 人）。）

2）性格表現用語の収集：（1）小学校 1 ～ 6 年生の全教科書から用語を集めていることから、「新レインボー小学校国語辞典 改訂第 3 版」（株）学習研究社）を選んだ。（2）辞書から、心理学専攻の院生 5 名により、性格や人柄を表現する言葉として、1344 語が選ばれた。（3）13440 語について、①日常よく使う、②使うか使わないか決めがたい、③ほとんど使わない、の 3 件法で判断させ、5 人の内 3 人以上の一致を基準とし、また、類似度を除外しても 116 語が選ばれた。（4）先行研究（柏木・和田・青木 1993、和田 1996、柏木・倉・藤島・山田 2005）を参考に、5 因子を想定した際に、不足すると考えられる開放性項目を中心に 17 項目を追加して、133 項目の性格を表現する言葉をリストアップした。

「性格を表現する言葉のリスト」調査票の内容：133 語について、（1）性格やひたむきを表現する言葉として、ふだん使っているか/使わないか、（2）自分の性格やひたむきにどの程度当てはまるか（そうだや違う 1 の 5 件法）、もし自分の性格をあらわすと思えない場合には X を付ける。（3）FS とし
2) 因子分析の結果: 純粋な因子とみなし、分析対象用語として、①学習頻度50%以上、②学習・準備の段階が4＞x＞2、③不労が±1以上の基準として、結果的に68語が選ばれた（これらの言語については、先行研究家から分類が示されるマーカー語として、E 6語、A7語、C7語、N6語、O7語、その他35語が含まれていた）。

因子分析法は、試みに、主因子法・エマックス回転の結果、①因子負荷の絶対値が3未満、②因子の負荷に35以上を超えた結果、4回目で18項目を除外して収束した（Table2。負荷量の高い5項目を示す）。因子1は「なまけい」「ひきょう」などからN因子、因子2は「つらい」「つらい」「つらい」「つらい」「つらい」からC因子、因子3は「かっさ」「おもしろい」からE因子、因子4はC、E、O因子が混在し、因子5はO因子が混在している。

Table2.

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子</th>
<th>因子42</th>
<th>因子3</th>
<th>因子2</th>
<th>因子1</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>kちすか</td>
<td>6.586721</td>
<td>0.19206</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
</tr>
<tr>
<td>kちずか</td>
<td>0.19206</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
</tr>
<tr>
<td>kちずか</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
</tr>
<tr>
<td>kちずか</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
</tr>
<tr>
<td>kちすか</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
<td>0.17903</td>
</tr>
</tbody>
</table>

考察

1) 単純計分について: 使い頻度が50%以上は68語で、約半数であった。平均・SDから除外対象になったのは3語に過ぎず、意味表現要素が過剰に選ばれたと考えている（当該語句は辞書図記載）。

2) 因子分析の結果について: 今回は、試みに、主因子法・エマックス回転の結果を示したが、現段階ではBig5は再現されていない。他の探索的因子分析を行う、②客観的因子分析を試みる、等が残されている。今後の課題としては、1)主成分分析に、多様な因子分析を試みると、2)麻生国語辞典に特有な1)主観的要素や、2)行動表現の挑戦、3)評価的用語の除外（村上2003）など、表現表現の再吟味が必要かもしれない。